国立公園の案内標識に準拠した情報提供のしくみづくりに関する基礎的研究

土屋　薫
江戸川大学国立公園研究所

1. はじめに

国立公園に関する現行の基本法である自然公園法は、主に管理運営の規定にとどまり、どのような利用が「国民の保健、休養及び教化に資する」のかについては、明示していない。つまり実際の利用に際しては、保護・管理的な視点、公園内の当該地点へのアクセス権、利用者サイドに立ったルート策定、現地関係者との調整といった現実的制約を乗り越える必要がある。ところが、そうした制約は都合よく可視化されているわけではない。現在、国立公園の利用者が与えられている情報は、案内標識に関わるもののみである。

そこで本研究では、国立公園内の案内・標識情報に準拠した補足情報の提供方法について検討することを目的とする。

2. 研究の方法

これまで研究所内で進めてきた国内の国立公園内の案内標識の調査に基づいて、当該エリアの総合情報案内板の設置場所と設置内容のマッチングが妥当かどうか、その設置場所を地図上にプロットし確認・検討していく。ここでは矢印や注意看板は取り扱わないものとする。

3. 対象地

熊本県阿蘇地域「阿蘇くじゅう国立公園」周辺を対象とする。また本研究の成果は国立公園研究所のwebページにて公開することを目指しているため、本報告書では対象地の中から特に特徴的な3地点(北から「大観峰」、「草千里」、「南阿蘇」)を取り上げる(**図1**、**図2**)。

4. 現地調査日

2017年2月26日～28日

5. 調査結果

(1) 大観峰エリア

ここでは、全体看板(**図3**)の中に、特性別によるエリア区分図(**図4**)、道路・施設を示した周辺案内図(**図5**)、多言語表示(**図6**：日本語・英語・ハングル・繁体字・簡体字の5言語)のほか、QRコードによる「GPS機能付き携帯サイト」(「阿蘇ナビ」)と連動するしくみが設けてある(**図7**、**図8**)。ただ実際には表記間違いで別のページに飛んでしまい、それが修正されていないままになっているのは難点である。

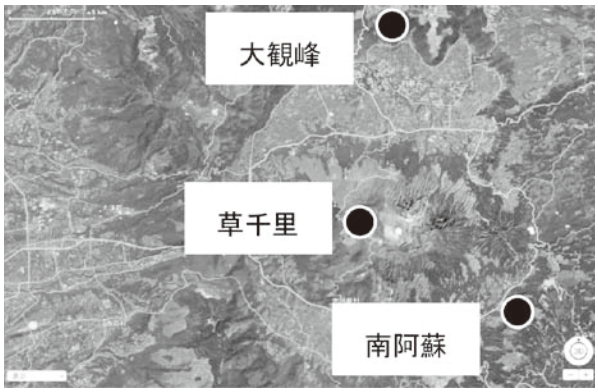

図1　阿蘇山周辺と対象地点(航空写真)

図2　阿蘇山周辺と対象地点(地図)

図3　大観峰全体看板

図4　エリア区分図

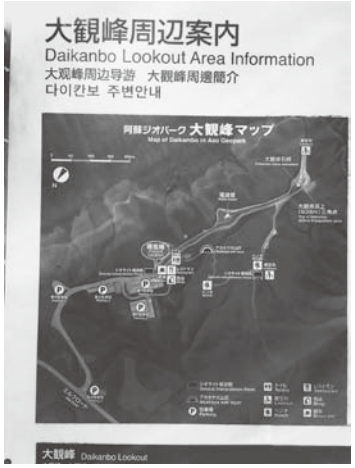

図5　周辺案内図

図6　多言語表示

図7　阿蘇ナビQRコード

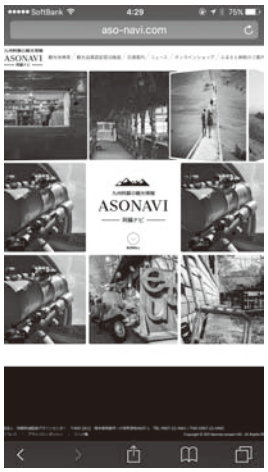

図8　阿蘇ナビ画面

（2）草千里エリア

阿蘇山周辺の代表的な草地景観で有名な草千里であるが、実際の駐車場周辺には多くの案内標識が存在しており、来訪者に必要十分な情報が届くとは限らない状況となっている（**図9**、**図10**、**図11**、**図12**）。なお**図12**のピンの地点に**図13**の看板がある。

この写真看板はわかりやすいだけでなく、多言語表示、エリアマップ、周辺道路案内、携帯サイトへの連動もできており、このスタイルが阿蘇くじゅう国立公園における案内標識の定型となっていると思われる。

今後は、現場案内標識から携帯サイトへというベクトルだけでなく、携帯サイトから現場案内標識への誘導というベクトルのしくみを装備する必要があると思われる。

図9　草千里周辺と対象地点（航空写真）

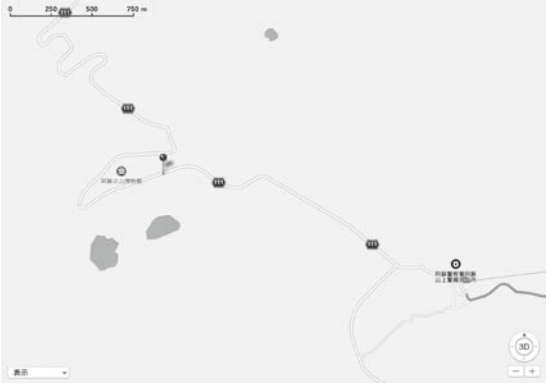

図10　草千里周辺と対象地点（地図）

図11　草千里駐車場周辺（航空写真）

図12　草千里駐車場周辺（地図）

図13　烏帽子岳写真看板

図14　南阿蘇ビジターセンター周辺（航空写真）

図15　南阿蘇ビジターセンター周辺（地図）

（３）南阿蘇エリア

この高森町の休暇村エリア内に位置するビジターセンターは、地図だけで見ると心もとないが実際に航空写真で見ると、施設配置も案内標識の存在もよくわかる（**図14**、**図15**：ピンの位置が**図16**）。

ただ実際に、ビジターセンターの看板自体は、道路側からはほとんど確認することが難しい。

図16　南阿蘇ビジターセンター看板

図17　南阿蘇自然学習歩道看板

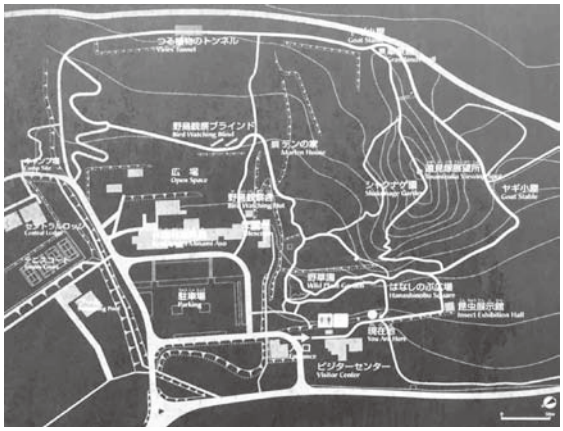

図18 南阿蘇自然学習歩道看板アップ

図19　南阿蘇看板位置（航空写真）

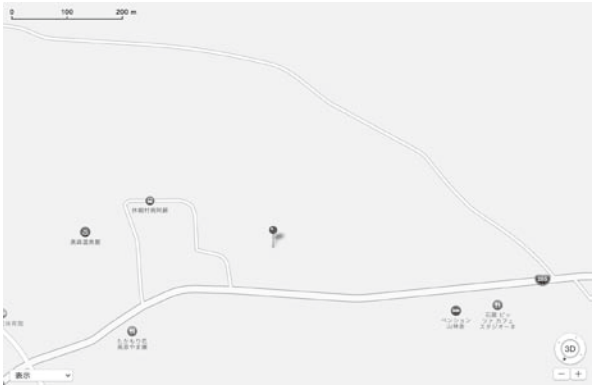

図20　南阿蘇看板位置（地図）

さらに、この施設内にある遊歩道の案内標識は、この遊歩道を歩くことを決めた人物にしか認識できないような位置に設置されている（**図17**、**図18**、**図19**、**図20**）。

6. まとめ

こうした状況から、今後の情報提供の指針として、以下の3点が明らかになった。

1）携帯端末から現場案内標識への誘導を前提としたしくみを整備する必要がある

2）その際、単に地図だけではなく、航空写真を導入すると有効である

3）案内標識情報の妥当性は現地踏査と照らし合わせることでより精査できる

国立公園内の案内・標識情報に準拠しつつ情報を補足していくことが、実際の利用に際した現実的制約を乗り越えることにつながり、そのことによって「保健、休養及び教化に資する」ものとしての国立公園の姿が浮かび上がってくる。またこうした指針に従って現地情報が公開されたwebページは、閲覧数の増加と国立公園の利用増加を同時に引き上げていくことにつながると思われる。

参考文献

土屋薫、2016、「国民は国立公園で何をするのか」『江戸川大学国立公園研究所年次報告』創刊号、105-107

土屋薫、2013、「着地型観光ツールとしてのデジタルマップの可能性　―観光情報とルート選択に関する考察―」『江戸川大学紀要』23、245-253

土屋薫・廣田有里、2016、「着地型観光の環境整備に向けたAR　技術による情報提供ツールの開発　―流山市『本町』界隈における観光情報提供サービスを事例として―」『江戸川大学紀要』26、73-81

土屋俊幸、2014、「我々にとって国立公園とは何なのか―地域制自然公園の意義と可能性―」『林業経済研究』60(2)、1-12